

「この」「その」による集合内要素の照応について

松本 哲也

キーワード：指示語「この」「その」、照応、名詞並立、集合、トピック連鎖、認知制約

要 旨

先行文脈の2つの名詞のうち的一方を後続文脈で「この」「その」により照応すると不自然になるという現象については、田中(1981)が指摘して以来、考察されていない。この現象は、「Aト/ヤB…」のような形式だけでなく、「A、B…」のような名詞句の並立、「Aホカ/タチ/ナド(数量詞)」のような形式でも見られる。本稿ではこの現象を、「集合内要素を「この」「その」により直接照応すると不自然になる」と一般化し、その原因を「集合」から「集合の要素」へのトピック転換の不自然さによるものであると結論する。

さらに観察を進めると、統語的には集合内要素であるにも関わらず、名詞句の情報量が増えると、「この」「その」による照応が比較的自然的になる、という現象が認められる。この現象には、集合の各要素の情報量が増えると、集合として結束的に認知される度合いが低くなることが関わっていると考えられる。そこには、文脈情報処理の時間軸に沿った線状性、および、短期記憶が保持する情報量の少なさ、という2つの認知制約が反映していると言える。

0. はじめに

「この」「その」による照応についての従来の研究では、「この」と「その」の使い分けの原理の解明が中心的課題とされてきた。しかし、使い分け以前に、そもそも「この」「その」が付加された名詞句により照応できる名詞句はどのような名詞句かという、より基本的な問題については、ほとんど追究されなかった¹⁾。

本稿前半では、その問題に関係する田中望(1981)の指摘した現象について考察し、後半では、前半で扱った現象と統語構造が類似しつつも振る舞いの異なる例を取り上げ、その差異について考察する。

1. 集合内要素の照応

本発表で問題とするのは、以下の現象である。(以下14行は田中(1981)からの引用。例文の番号は本稿の通し番号に改めた。下線は筆者が施した。)

「…「コソア」による照応と裸の名詞的語句による照応との用法の違い…に関する研究もほとんど手がつけられていない分野であろう。ここでは、つぎのような現象を指摘するにとどめる。

- (1) きのうち知りあいの医者と弁護士に会った。医者は私の顔を見るとすぐに何か心配事があるのかと言った。

この文連続には何の奇妙なところもないが、(1)の「医者」を「その医者」におきかえると奇妙な文連続になる。

- (2) きのうち知りあいの医者と弁護士に会った。その医者はわたしの顔を見るとすぐに何か心配事があるのかと言った。

しかし、次の(3)は正常な文連続である。

- (3) きのうち知りあいの医者と弁護士に会った。その医者と弁護士はわたしの顔を見るなり異口同音に何か心配事があるのかと言った。

これらの例は、「その」付きの名詞的語句の指示対象が先行する言語的コンテキストによって特定される対象のすべてを覆うものでなければならないことを示している。…」

(田中1981)

指摘の通り、先行文脈の「AトB」のうち的一方だけを照応すると奇妙である²⁾。

- (4) むかしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんがおりました。
ある日、{#この／＃その／φ} おばあさんが川にせんとくに行くと、…

田中の挙げた例では、先行文脈において、「AトB」形式により複数の対象が導入されているが、他にも、「AヤB」形式、「A、B…」のような名詞句の列挙、「Aホカ/タチ/ナド(数量詞)」の形式により複数の対象を導入した場合にも同様の現象が見られる。

- (5) 店先には今が旬のリンゴが並んでいた。
{その／φ} リンゴを手にとると、甘酸っぱい香りがした。
- (6) 店先には今が旬のリンゴやミカンが並んでいた。
{#その／φ} リンゴを手にとると、甘酸っぱい香りがした。

(7) 映画研究会は、山田君が会長だ。

撮影のときには、{この／その／ ϕ } 山田君が監督になる。

(8) 映画研究会は、山田君、長嶋君、福田君が三役だ。

撮影のときには、{# この／# その／ ϕ } 山田君（／長嶋君／福田君）が監督になる。

(9) 映画研究会は、山田君ほか2人が三役だ。

a. 撮影のときには、{この／その／ ϕ } 3人が中心となる。

b. 撮影のときには、{# この／# その／ ϕ } 山田君が中心となる。

(6)では「AやB」形式、(8)では名詞句の列挙、(9)では「Aホカ(数量詞)」の形式により複数の対象を導入している。(9)のタイプには、「ホカ」以外にも「タチ」「ナド」等の形式によるものも含めることができる。以下、これらの形式により導入された複数の対象を「集合」と呼ぶことにする。集合の導入形式を以下に整理しておく。

(10) 集合の導入形式

a. [(名詞句)ト／ヤ(名詞句)…]

b. [(名詞句)、(名詞句)、…]

c. [(名詞句)ホカ／タチ／ナド／…(数量詞)]

これらの形式により導入された集合を、以下のように《 》で表示する。

(3) : [(《医者・弁護士》)]

(8) : [(《山田君・長嶋君・福田君》)]

(9) : [(《山田君・〇〇〇・〇〇〇》)]

2. 部分集合の照応

(10)の形式により導入された集合を「この」「その」で照応することは、集合全体を照応する形式であれば可能である。(11a)は同一形式の繰り返し、(11b)は数量詞による照応であるが、「この」「その」を付加しても全く自然である。(ただし、(11b)には冗長さがある。)

(11)きのう知りあいの医者と弁護士に会った。

a. {その／ ϕ } 医者と弁護士はわたしの顔を見るなり異口同音に何か心配事があるのかと言った。

b. {その／ ϕ } 2人はわたしの顔を見るなり異口同音に何か心配事があるのかと言った。

「集合全体」と断ったのは、部分集合を抜き出して直接照応する形式には、「この」「その」が付加できないからである。例えば、以下の(12)では数量詞により部分集合を照応しているが、「この」「その」を付加すると不自然になる³⁾。

- (12)先月、殺人犯として指名手配中だった山田三郎と仲間7人が某銀行に押し入り、5時間にわたって籠城しました。
{# その / (#) ϕ} 7人は逮捕され、山田三郎は抵抗の末射殺されました。

(12)においては、形式上分離して個別に扱えるように思われる「7人」を照応するのに、「この」「その」が付加できない。

しかし、部分集合を直接照応していないと思われる「そのうち+数量詞」「その半分」「その3分の1」のような形式については、全く自然である。

- (13)昨日、殺人犯として指名手配中だった山田三郎と仲間7名が某銀行に押し入り、5時間 にわたって籠城しました。{その / ϕ} 半数は逮捕され、残りは抵抗の末射殺されました。

これらの形式は、部分集合を直接照応しているのではなく、前提として集合全体を照応し、その上で指示対象である部分集合が確定されるのだと考えられる。

以上から、田中望(1981)の指摘は、(14)のように言い換えることができる。

- (14)集合内要素(一要素または部分集合)を直接照応する形式に「この」「その」を付加すると不自然になる。

3. 「この」「その」とトピックの連鎖構造

では、なぜ、集合内要素を「この」「その」で照応すると不自然になるのだろうか。

結論を先に述べると、「この」「その」の付加により生じる強調効果が原因で(一般的な「話題」という意味での)トピックが集合からその要素に唐突に切り換えられ、文から文へのトピックの連鎖構造が歪んでしまうためである、と考えられる。

「この」「その」(「あの」)の基本的機能は、指示対象が存在する心的領域の指定である、とすることができるが⁴⁾、定性の保証が不要な照応名詞句に付加した場合には、この機能が強調効果を発揮する。

- (15)シェフが逃げたって？それなら料理が大好きな {この / ϕ} 私がやりましょう。

(16) 太郎のやつ、この間あれだけ俺達にサボるなって言ってたのになあ。

{その／#φ} 太郎が真っ先にゼミをサボりやがったよ。

(15)は現場指示、(16)は文脈指示の例である。通常の文脈では、代名詞や裸の固有名詞のような、文脈既出あるいは話し手聞き手ともに既知であることが使用の前提となる名詞は、「この」「その」の付加が不要な強調効果を生じさせるため不自然となる。(15)(16)は強調が相応しい状況・文脈であり、代名詞・固有名詞に「この」「その」が付加されることが全く自然である。特に(16)は庵功雄(1994)が指摘した「テキストの意味極大の「その」」の例であるが、固有名詞であるにも関わらず、「φ」が不自然になる(先行文脈とのつながりが悪くなる)⁵。

連文のつながりの善し悪しに関わる要素の一つとして、一つの文から次の文へのトピックの引き継ぎ方がある。本稿での「トピック」は以下のテストで引き出せる単語とする⁶。

(17) テキスト全体からテキスト中の任意の一文までについて、「何の話をしてるの？」と問われたときの答えとして適切な単語。

先行文脈でトピックでない名詞句を「この」「その」により強調してしまうと、先行文脈からのトピックが、後続文脈で唐突にその強調された名詞句に切り換えられる。そのため、トピックの連鎖が歪んだ構造になり、不自然になるのだと考えられる。

(18) 小さい頃、太郎は花子をよくいじめていたんです。

a. でも今は、{その／φ} 太郎が花子の一番の理解者なんですよ。

b. でも今は、{#その／φ} 花子が太郎の一番の理解者なんですよ。

(18)では、「ハ」でマークされた先行詞を「その」で照応して後続文の主語にするのは自然だが、「ヲ」でマークされた先行詞を「その」で照応して後続文の主語にすると奇妙な感じがする。これは、先行文脈でトピックとして(相対的に)重要でない名詞句の「花子」を後続文脈で強調したため、トピックの連鎖が歪んだ構造になったのだと思われる。

(19) 14日未明のコンビニ強盗は黒のジーンズで、凶器のナイフを後ろのポケットから取り出したという。

a. ジーンズには某メーカーのマークが入っており、{#この／#その／φ} ナイフも特徴のある形状だったため、手がかりとして有力視されている。

b. ナイフは特徴のある形状で、{#この／#その／φ} ジーンズにも某メーカーのマークが入っていたため、手がかりとして有力視されている。

(19)では、トピックとしての重要度に大差がないと思われる二つの対象「黒のジーンズ」「凶器のナイフ」の一方だけを(一方の照応を行った後で)「この」「その」により照応すると、不自然な文脈になる。これは、「この」「その」が付加された一方の名詞句だけがトピック化してしまい、ここでもやはり、トピックの連鎖が歪んでしまっているのだと思われる。

このように、「この」「その」が強調効果を発揮してトピック連鎖が歪む場合、その文連続は不自然になるのである。

本稿で問題にしている集合内要素の照応についても、後続文において集合中の一要素を「この」「その」により強制的に照応するということは、「集合」から「集合の一要素」にトピックを唐突に切り換えるということであり、奇妙なトピック連鎖を生じさせ不自然になるのだと考えられる。

4. 個別の属性情報を付加された要素の「集合」

ここまでで取り上げてきた集合は、集合中のどの要素であっても「この」「その」による照応が不自然になるものばかりであった。しかし、以下の(21)(22)で取り上げる集合は、最後尾の要素に限って「この」「その」による照応が不自然にならない⁹⁷。

(20) (機械の説明書。図や写真は載っていない)

a. 本体の手前に赤いネジがあります。

まず、{この／その／φ} 赤いネジを外します。

b. 本体の手前に赤いネジ、青いネジ、黄色いネジがあります。

まず、{#この／#その／φ} 赤いネジ(／青いネジ／黄色いネジ)を外します。

[《赤いネジ・青いネジ・黄色いネジ》]

(21) (状況は(20)と同じ)

本体の手前に赤いネジ、側面に青いネジ、下面に黄色いネジがあります。

a. まず、{#この／#その／φ} 赤いネジ(／青いネジ)を外します。

b. まず、{この／その／φ} 黄色いネジを外します。

c. まず、{その三つ／#その二つ} のネジを外します。

[《赤いネジ・青いネジ・黄色いネジ》]

(22) 映画研究会の三役は、会長の山田君、副会長の長嶋君、会計の福田君だ。

定例会での会計報告は、{その／φ} 福田君が行った。

[《山田君・長嶋君・福田君》]

(20)では個別に属性情報が与えられていないためにどの要素も「この」「その」で指せないが、それに対して(21)では、それぞれのネジに「機械のどこにあるか」という個別の属性情報が付加されていることにより、(最後尾の対象だけ)個別に扱うことが可能になっているのだと考えられる。《 》で表示することにした先の集合と振る舞いは異なるのだが、(21c)に示したように数量詞「2つ」では照応できないので、集合として扱う。(〈 〉で表示する。)

このような集合の場合、それぞれの要素の扱い方としては、まとめずに「列挙」しているのであり、その意味では名簿を読みあげているときの扱い方と似ていると言える。

(23) (名簿のチェックの場面。それぞれが名簿を持っている。話し手は、少し離れた聞き手に向かって名簿を読み上げている。発話しているのは話し手のみ。)

a. 甲：いい？読むよ。山田さん、長嶋さん、福田さん、

乙：あ、{#この/#その/φ} 山田さん(/長嶋さん)、会費払ってない。

b. 甲：いい？読むよ。山田さん、長嶋さん、福田さん、

乙：あ、{この/その/φ} 福田さん、会費払ってない。

[山田さん・長嶋さん・福田さん]

集合の場合、複数の指示対象の情報がひとまとめに処理されるのに対し、名詞の列挙の場合には、名詞の情報を初めからまとめようとせず、それぞれの名詞の情報が、ひとつひとつベルトコンベアの上を流れていくような処理過程をあらかじめ採用しているものと思われる。

(24) 情報処理過程(新しい情報 → 古い情報)

集合《 》：(知覚による入力) → [福田さん・長嶋さん・山田さん] → …

列挙 : (") → [福田さん] → [長嶋さん] → [山田さん] →

個別の情報が付加された集合の場合には、名詞句一つあたりの情報が「重い」ため、処理の都合上ひとまとめに扱えず、ひとつひとつの名詞の情報を順番に処理するしかなく、結果的に列挙の場合と扱い方が似るのだと思われる。

(25) 情報処理過程

集合〈 〉：(知覚による入力) → [(属性情報)福田さん] → [(属性情報)長嶋さん] →

このことには、短期記憶の容量の少なさが関係していると考えられる。

5. おわりに

本稿では、「この」「その」による集合内要素の照応が不自然になるという現象に対して、「この」「その」の強調効果によるトピック化がトピックの連鎖構造を奇妙な構造にしてしまうのがその原因である、という説明を行った。

「この」「その」がどのような名詞を照応できるか、という問題は、裸名詞による照応との違いは何かという大きな問題へと発展する。裸名詞による照応については考察すべき問題がいまだ多く残っている。本稿は、そのほんの一部を考察したに過ぎない。

トピックの連鎖構造に着目した説明方法は「この」「その」の一般的な性格を記述する上でも有効である。

「この」「その」による照応は、基本的に、照応詞が先行詞からある程度以上の距離を超えて遠くなればなるほど不自然になる。これは、トピックとしての重要度が同等以上の名詞句にトピックが切り換わる可能性が高くなることと関係している、と考えられる。

前節で見てきた「個別の属性情報を付加された要素の集合」においては、トピックとしての重要度に(大)差がなく、最後尾の名詞だけが自然になる。通常の文連続においても、そのような「線状制約」は存在する⁹⁸。

(26)先月、病院に行ったんですけど、佐々木さん、とても元気でもうじき退院できると言っていました。ついでに木村さんのところにも寄ったんですけど、彼も近い内に退院だと喜んでいました。昨日久しぶりに行ったら {#その/φ} 佐々木さんが亡くなられたと聞いて驚きました。

(27)先月、病院に行ったんですけど、佐々木さん、とても元気でもうじき退院できると言っていました。昨日久しぶりに行ったら {その/φ} 佐々木さんが亡くなられたと聞いて驚きました。

「この」「その」による照応はこのような線状制約を受けていると言えるが、このことについては、「この」「その」が短期記憶を参照するためであると説明することが可能である (cf. 吉本啓1992) が、その説明に、トピックの連鎖という観点を加えることで、より厳密な説明が可能になると思われる。

注

- *1 この点に自覚的な研究として、庵功雄(1994など)がある。
なお本稿では、「この」「その」がいずれか一方でも照応できれば「この」と「その」の差異にこだわる必要がなく、むしろ、その共通性を考察することを目的としているので、両者を同等に扱う。
- *2 本稿では‘#’を、照応形式の不適切さにより生じる「連文としてのつながりの悪さ・不自然さ」を示すマークとして使用する。単文の非文法性を示すのに用いられる‘*’とは異なる。
- *3 (12)において、集合中の一要素である山田三郎だけを主題とする以下のような文脈を続けても不自然さはない。
・先月、殺人犯として指名手配中だった山田三郎と仲間7人が某銀行に押し入り、5時間にわたって籠城しました。
a. {この／その／φ} 山田三郎は2年前の強盗事件の容疑者として全国に指名手配されていました。集合内要素自体の情報価値、あるいは、各要素を表現する言語形式により、トピックとしての重要度に差が生じていることが、自然さの違いの原因だと考えられる。要素間に重要度の差がある集合の振る舞いは、考察すべき問題を含んでいるが、本稿では最小限の記述をするにとどめる。
また、(12)において、φの場合にも若干の不自然さがあるが、以下のように後続文脈の固有名詞を数量詞に改めて数量詞による部分集合の並立にすると、全く不自然さがなくなる。(ただしこの場合、後の文脈で「山田三郎」の属する集合を明らかにしなければ不自然になる。)
b. {# その／(#)} φ} 7人は逮捕され、山田三郎は抵抗の未射殺されました。(=(12))
c. {# その／φ} 5人は逮捕され、残りの3人は抵抗の未射殺されました。
興味深い現象であるが、上の問題とともに、別稿で考察する。
- *4 指示語研究では草創期から既に、このような認知的観点からの説明と本質的には同じ説明が行われている。例えば佐久間鼎(1936)の「なわばり」の概念など。
- *5 強調に「この」と「その」のどちらが選択されるかは、その指示対象がどの心的領域に存在するかによる。
- *6 庵(1996)はトピックを、テキストを一単語で要約したもの、と定義している。
- *7 (21b)が自然かどうかの判断には揺れがある。関東日本語談話会で発表した際に出席者30名ほどに確認したところ、その内の3分の1程度が不自然であるという判断を下した。そのような内省を持つ話者にとって(21)と(20)に差異がないということになる。結束度の高い(20)のような集合とそうでないものの境界線上に(21)のような例があると捉えれば、判断に揺れが出るのは自然なことである。
- *8 「この」には、その文章全体のトピックを指す場合がある。
・ティラー民族画展と題した珍しい美術展iが開かれている。6月5日までは東京・渋谷のたばこと塩の博物館で、そのあと新潟など各地を回る。(13文略)折から全国でインド祭が催されている。この美術展iはその一環だ。(庵1997)
文章全体のトピックは、その文章が続く限りはトピックとして最も重要度が高く、情報として活性化し続けていると考えられる。文単位で移り変わるトピックと、このような文章全体のトピックはレベルが異なると考えられる。(そのことは、前者が「その」により指す余地があるのに対して、後者は「この」でしか指せないという現象にも表れている。)上の例についても、文章全体のトピックを導入した先行詞自体は照応詞から離れているが、情報としてのトピックは活性化し続けていると考えられる。「線状制約」はそのような多層的なトピック構造に関する制約と捉えるべきであり、「(そのトピックが属するレベルにおける)最後尾のトピックを指示せよ」と規定される。

参考文献

- 天野みどり(1993)「文脈照応「その」の名詞句解釈に果たす役割」『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂
- 庵功雄(1994)「結束性の観点から見た文脈指示—文脈指示に対する一つの接近法—」『日本学報』13 (大阪大学)
- 庵功雄(1995a)「テキストの意味の付与について—文脈指示における「この」と「その」の使い分けを中心に—」『日本学報』14 (大阪大学)
- 庵功雄(1995b)「コノとソノ—文脈指示の二用法—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下)連文・複文編』くろしお出版
- 庵功雄(1996)「指示と代用」『現代日本語研究』3 (大阪大学)
- 庵功雄(1997)「「は」と「が」の選択に関わる一要因—一定情報名詞句のマーカ―の選択要因との相関からの考察—」『国語学』188
- 加藤重広(1997)「日本語数量詞に見る認知とテキスト戦略」『言語』26-11
- 金水敏(1990)「指示詞と談話の構造」『言語』19-4
- 金水敏・田窪行則(1990)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展3』(日本認知科学会)講談社
- 金水敏・田窪行則(1992)「日本語指示詞研究史から／へ」同編『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房
- 金水敏・田窪行則(1996)「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3-3
- 小林英樹(1995)「「NトN(ト)」と「NヤN」—名詞の並立—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上)単文編』くろしお出版
- 佐久間鼎(1936)『現代日本語の表現と語法』厚生閣
- ジル・フォコニエ(1996)『(新版)メンタルスペース』(“Mental Spaces” 新版(1994)の邦訳)坂原茂・水光雅則・田窪行則・三藤博共訳、白水社
- 田窪行則(1984)「知っていることと知りたいこと」『日本認知学会発表論文集1』
- 田窪行則(1989)「名詞句のモダリティ」『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 田窪行則(1997)「日本語の人称表現」『視点と言語行動』(同編)くろしお出版
- 田中望(1981)「「コソア」をめぐる諸問題」『日本語教育指導参考書8 日本語の指示詞』(国立国語研究所)
- 山梨正明(1992)『推論と照応』くろしお出版
- 吉本啓(1992)「日本語の指示詞コソアの体系」(Yosimoto1986‘*On Demonstratives KO/SO/A in Japanese*’『言語研究』90 の日本語訳)金水・田窪編1990所収

(1998年8月20日 受理)